

平成21年4月9日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18580224

研究課題名（和文） 低所得層のフードセキュリティとソーシャル・キャピタル

研究課題名（英文） Food Security and Social Capital for the Poor

研究代表者

石田 章 (AKIRA ISHIDA)

島根大学・生物資源科学部・准教授

研究者番号：50346376

研究分野：農学

科研費の分科・細目：農業経済学・農業経済学

キーワード：フードセキュリティ、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）、途上国、貧困、社会経済ショック、脆弱性

## 1. 研究計画の概要

従来の農業経済研究においては、国あるいは地域レベルで食料不足やフードセキュリティの問題が頻繁に取り上げられてきた。その一方で、世帯レベルでのフードセキュリティ、とくに低所得層の栄養・食料摂取状況に関する社会科学的分析は意外なことにあまり行われていない。そこで本研究では、研究対象国あるいは地域の食料政策および食料需給バランスについて整理したうえで、所得水準等の諸要因にも配慮しつつ、とくに最近人的資本や物的資本では把握できない社会的要因として注目を集めている「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」の概念を援用しつつ、低所得層のフードセキュリティを規定する諸要因を解明することを主たる目的とする。

なお定量分析には、独自調査や国際機関等が実施した大規模標本調査の個票データを使用する。

## 2. 研究の進捗状況

栄養不良の状態にある人口比率が高いバングラデシュ、ネパール、東ティモール南アフリカ共和国などの低所得世帯を事例として、ソーシャル・キャピタルの多寡が貧困世帯の食料摂取状況に及ぼす影響について分析した。個票データを用いた定量分析の結果、フードセキュリティの水準が低い可能性が高いのは、つぎのような条件をより多く満たす世帯であると考えられる。①女性が世帯主である。②世帯主の教育水準が低い。③所得水準が低い。④世帯貯金額・資産額が低い。

⑤家族員数が多い。⑥自家消費を目的とした農業生産を行っていない。⑦社会経済的なショックを経験した。⑧困窮時に「親戚・隣人のネットワーク」を利用することができない、あるいは「参加」の概念を用いて計測したソーシャル・キャピタルの水準が低い。

これに加えて、わが国のホームレスを対象として、食料摂取状況と社会的ネットワークとの関連についても検討した。その結果、①「移動型ネットワーク」は「開放的」かつ相互間の関係が「希薄」であり、純粋公共財的性格が強いが、それから得られる便益は少ないこと、②「定住型ネットワーク」は成員相互間の関係が「濃密」かつ非成員に「閉鎖的」であり、クラブ財的性格がより強いがゆえに、ネットワークに参加し得るものはより多くの便益を得ている、ことが明らかとなった。こういった分析結果を踏まえると、必要な食料の確保に迫られた低所得世帯が、既存の隣人や親戚ネットワークあるいはそれと同様な機能を有する相互扶助的な組織・団体・制度に加入することによって、所得向上と同時に緊急時に食料購入費を工面できるようなプログラムの積極的推進が必要であろう。途上国における食料摂取状況の改善という政策目標を想定したときに、ターゲットとなる食料入手において不利な立場にある低所得世帯を広くカバーするような既存の組織やネットワークへの介入が効率的であると考えられる。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

上記2でも述べたとおり、国際機関が実施した大規模標本調査や自らが実施した農村調査の個票データを用いて、低所得層のフードセキュリティを規定する直接的・間接的要因をある程度解明することができた。よって、本研究は概ね順調に進展していると判断できる。

#### 4. 今後の研究の推進方策

2006年度から08年度の3年間において、東ティモール、バングラデシュ、ネパール、インドネシア、マレーシア、南アフリカ共和国を対象とした定量分析を行ってきた。上記3でも述べたとおり、本研究は当初計画どおりに順調に進捗しているが、時間的余裕が十分にあることから、当初計画には設定していなかったいくつかの小課題に挑戦する予定である。具体的に、その小課題を列挙すると、①低所得層のフードセキュリティを規定する要因について、パネルデータを用いた時系列的な分析を行う（おもにインドネシアとフィリピンを想定）。②世帯レベルではなく、個人レベルでのフードセキュリティ（世帯内の食料資源配分）についても言及する。③過去3年間で取り扱うことができなかった途上国も研究対象とする（たとえば中南米諸国やアフリカ諸国など）。④さらに時間的余裕があれば、インドネシア、ネパール、マレーシア等で現地調査を実施し、いままで検討してきたフードセキュリティの規定要因についてより詳細な議論を展開していく。

#### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計18件）

- ①石田章, 横山繁樹「アジア経済危機後における食料消費支出の変化—マレーシアを事例として—」『農業市場研究』18(1), 印刷中, 2009年。(査読有り)
- ② Bhatta, Kiran Prasad, Akira Ishida, Kenji Taniguchi and Raksha Sharma. “Whose Extension Matters? Role of Governmental and Non-Governmental Agricultural Extension on the Technical Efficiency of Rural Nepalese Farms” *Journal of South Asian Development*, Vol. 3, No. 2, 2008, pp.269-295. (査読有り)
- ③ Bhatta, Kiran Prasad, Akira Ishida, Kenji Taniguchi and Raksha Sharma. “Does Kitchen Garden and Backyard Livestock Farming Help Combat Food Insecurity?: An Example of Nepalese Households”, 『2008年度日本農業経済学会論文集』, 2008年, pp.376-383. (査読有り)
- ④佐藤菜穂子, 石田章「社会経済脆弱地域に

におけるフードセキュリティー—東ティモール共和国を事例として—」『都市計画論文集』43(3), 2008年, pp.343-348. (査読有り)

⑤武田美由紀, 石田章, 横山繁樹, 佐藤佳美「ホームレスの食料摂取状況とソーシャル・キャピタル」『農業市場研究』16(1), 2007年, pp.90-95. (査読有り)

⑥石田章, 細田崇史, 横山繁樹「バングラデシュにおける都市スラム居住者の医療サービス利用状況とソーシャル・キャピタル」『都市計画論文集』41(3), 2006年, pp.641-646. (査読有り)

⑦細田崇史, 石田章, 横山繁樹「バングラデシュ都市部における貧困地区住民の所得水準とソーシャル・キャピタル」『国際協力研究』22(2), 2006年, pp.18-28. (査読有り)

⑧細田崇史, 石田章, 横山繁樹「食料摂取とソーシャル・キャピタル—バングラデシュにおけるスラム居住世帯を事例として—」『農業経済論集』57(1), 2006年, pp.79-88. (査読付き)

⑨ Bhatta, Kiran Prasad, Akira Ishida, Kenji Taniguchi and Raksha Sharma. “Performance of Agency-Managed and Farmer-Managed Irrigation Systems: A Comparative Case Study at Chitwan, Nepal” *Irrigation and Drainage Systems*, Vol. 20, No. 2-3, 2006, pp.177-191. (査読有り)

〔学会発表〕（計11件）

①佐藤菜穂子, 石田章, 横山繁樹「経済危機下における途上国の食料摂取状況—インドネシアを事例として—」, 2007年度日本農業市場学会, 2007年7月1日, 愛媛大学。

②石田章, 横山繁樹, 細田崇史「途上国における経済ショックと貧困世帯のフードセキュリティー—南アフリカ共和国・KwaZulu-Natal州を事例として—」, 2006年度日本農業市場学会, 2006年7月2日, 弘前大学。

〔図書〕（計2件）

①石田章「マレーシア地域戦略の中の農業」, 進藤栄一・豊田隆・鈴木宣弘編『農が拓く東アジア共同体』日本経済評論社, 2007年, pp.188-195.

②Yokoyama, Shigeki and Akira Ishida. “Social Capital and Community Development.” In Yokoyama, Shigeki and Takeshi Sakurai (eds.) *Potential of Social Capital for Community Development*, Tokyo, Asian Productivity Organization, 2006, pp.10-26.